

第31回

函館港イルミネーション映画祭 2025

第29回シナリオ大賞

準グランプリ

# オーバーハード

星埜 まひろ





**【作者プロフィール】**

星椋 まひろ（ほしの まひろ）

作家。1997年、北海道出身。2023年『完璧な夜』『She saw I saw』『詩が分かつ』第4回 RANGAI文庫賞受賞。著書『君は僕のエレジーみたいだ』。しろくまとからあげが好き。

## (登場人物)

関根蓮(せきねれん) 28歳。幼いころから老女が好きな元フ  
リター。すずらんの丘の募集を見て、札幌から函館  
に移住する。いつも基本的に微笑んでいる。

小松美代(こまつみよ) 76歳。日本舞踊をやっていたが引退。  
友人の孤独死、百合子の認知症をきっかけにすずらん  
の丘を作ることを決意。蓮を毛嫌いしている。

遠山百合子(とやまゆりこ) 87歳。認知になってしまっ  
て、幼児退行してしまっただすずらんの丘の最年長。蓮を見  
て、初恋の人善治さんと勘違いする。花が好き。

中川幸恵(なかがわさちえ) 79歳。元スナックのママ。ムー  
ドメーカー。誰とでも仲良くなれ、蓮のことも早い段  
階で受け入れていた。カラオケの十八番は都はるみ。

芹沢寿実子(せりざわすみこ) 79歳。元教師で本を読むのが  
好き。物静か。実は女性が好きで、幸恵に幼い頃から  
片思いをしている。甘いものが好き。

小松涼子(こまつりょうこ) 62歳。美代の妹。いつも困った  
ように笑っている。蓮のことを面接で気に入る採用。  
姉のことは尊敬しているが、気の強さに困ることも。

中川雄馬(なかがわゆうま) 21歳。幸恵の孫。大学生。無愛  
想で感情があまり顔に出ないが、ばあちゃんっ子。蓮

の老女好きを変だと思っている。

中川由貴(なかがわゆき) 50歳。幸恵の娘で雄馬の母。幸恵  
からスナックを受け継ぎママをやっている。

(あらずじ)

初夏、関根蓮は電車に乗って札幌から函館にある老女しか暮らしていない施設『すずらの丘』の面接に向かっていた。

蓮は、老女が大好きだ。綺麗な人達と働きたいという純粹な気持ちを持っている。

しかし『すずらの丘』に暮らすのは、強烈な個性を放つ老女たち。元日舞家で気が強く、蓮の老女好きに嫌悪感を抱く美代。認知症で幼児退行している花が好きな百合子。元国語教師で理知的な寿実子。ムードメーカーでスナックの元ママ幸恵。そして彼女たちの手伝いをしている美代の妹涼子。

涼子に気に入られ、蓮は住み込みで働けるようになったのだが、入居初日から蓮は美代に敵視される。

だが、幼児退行していたはずの百合子が、蓮を初恋の人と重ね合わせて懐いてくる。

蓮はスナックで歓迎会をもらった際、美代の日本舞踊を見て一目惚れする。

施設では最初の方こそ美代に家事を指摘される蓮だったが、誠心誠意仕事と向き合うことで、徐々に美代も蓮に心を許していく。

親しくなっていく美代と蓮が気に入らない百合子。百合子に敵意を向けられて戸惑う美代。2人の老女にはさまれ、蓮はど

うしようもない気持ちになる。

やがて、百合子は静かにこの世を去った。

蓮はせめて笑顔でいようと気丈に振る舞っているが、それが美代の怒りを買う。「あんたは悲しくないのか」と美代は蓮に気持ちをおつけた。

蓮と美代がぎくしゃくしはじめ、寿実子が蓮に「実は女性が好きだ」と告白し、好きという気持ちはままならないけど、わかりたいと思う気持ちが大事だと言って励ます。

蓮は過去にも大切な人を亡くした経験から、自分に何ができるかを考え、悲しんでる人を笑わせたいと美代に伝えた。美代は蓮の気持ちにほだされ「あんたのこと、ちょっとだけ嫌いじゃない」と呟く。

夏の終わり、また日常が戻って来る。蓮は介護の勉強を始めた。好きな人のために何ができるのかを、それぞれが考えている。

## ○特急北斗・車内(昼)

よく晴れた青空、初夏を感じさせる青い海。潮風に揺れる草。

車窓から笑顔で海を眺める関根蓮(28)。

手には札幌から函館行きの特急切符を持っている。

特急北斗が、ゆっくりと函館に向かって走っていく。

## ○すずらんの丘(同日・昼)

元町、函館山の中腹にある昭和を感じさせる小綺麗な平屋の館。

玄関から長い廊下があり、脱衣所、キッチン、和室、鍵

付きの個室が5部屋、屋根裏部屋に続くはしごがあり、

廊下の一番奥にリビングと縁側があり、縁側からは港が

見える。

縁側から見える庭ではよく手入れされた花壇があり、す

ずらんやツツジが見事に咲いている。

花壇の片隅では遠山百合子(87)が泥団子を作っている。

× × ×

和室で隣合わせに正座する真顔の小松美代(76)と朗

らかな笑顔を見せる小松涼子(62)。

美代と涼子の目の前には面接に来た20代の女性が椅子

に座っている。

面接者は美代の圧にしどろもどろになっている。

面接者「えっと、人と関わるのが好きで、お年寄りも、もちろん大切に……」

美代、間髪入れずにバツサリと言いつ切る。

美代「もちろんで大切にされるほど、老人の世話は甘くないんだけど」

面接者、半分泣きそうになりながら。

面接者「す、すみません」

涼子、笑顔は崩さないが少し焦って。

涼子「まあまあ」

美代、無言で涼子を睨みつけ。

美代「とにかくもうお話することはありませんから、お引き取りください」

面接者、項垂れながら和室から出ていく。

涼子、その後ろ姿をおろおろと見送りながら。

美代が手を玄関の方に促す。

美代、面接者が去った後、大きなため息をつく。

涼子「来てくださったありがとうございます」

美代「最近の若者はてんで駄目ね。覇気がないわ」

涼子「姉さんが厳しすぎるのよ」

美代「当たり前でしょ。自分の生活預けんのよ」

机の上には山程の履歴書。全て赤ペンでバツがつけられている。

× × ×

面接の回想。

何人も女性の若者たちが美代と涼子の前に緊張した面持ちで座っている。

美代、何度も首を横に振る。

涼子、美代が首を横に振るたびに困ったように眉を八の時にして笑う。

× × ×

涼子「また広告出さなきゃいけないわね」

美代「何度やっても同じことよ」

涼子「でも……」

美代、眉間にシワを寄せて考える素振りを見せ。

美代「もうこの際、若い人間の手なんて借りる必要もないかも  
しれないわね」

中川幸恵（79）が慌てて和室までやってくる。

幸恵「美代ちゃん！ 百合ちゃんが全身泥だらけになっちゃったわ！」

百合子の笑い声が、和室に響き渡る。

美代、深くため息をついて。

美代「……今行くわ」

美代、幸恵、共に縁側の方へ向かう。

涼子も立ち上がり、玄関の方へ向かうと、玄関の引き戸が空き、汗だくの蓮が恐る恐る入ってくる。

蓮「ごめんください」

涼子「はい」

蓮「あの、家事手伝いの面接って、こちらで合ってますか？」

涼子「合ってるけど、応募してくださいだったかしら？」

蓮「いえ、応募はしてないんですけど、その、面接って、だめですかね？」

涼子、一瞬考え込みすぐ笑顔に戻る。

涼子「本当は駄目なのだろうけど、せっかく来ていただいたからね。どうぞ」

蓮、ガッツポーズをして。

蓮「やった！」

× × ×

和室にて向かい合う涼子と蓮。

終始笑顔の蓮に、若干困惑する涼子。

涼子の目の前の机には蓮の履歴書。住所欄に書かれた札幌という文字と職歴の『庭師、家庭教師、販売員、引越し屋』などの多様な経歴に驚き。

涼子「ずいぶん色々な仕事をしてきたのね」

蓮、照れくさそうに頭をポリポリとかいて。

蓮「全部フリーターですけど」

涼子「どうして札幌からわざわざうちには？ それに、募集は女性限定だったんだけど」

蓮「募集広告に、女性だけの老人施設って書いてあって、いてもたってもいられなくなっただけです」

涼子、首をかしげる。

蓮、突然恍惚の表情を浮かべ。

蓮「老いて、神秘だと思いませんか？」

沈黙が流れる。

涼子、目を丸くする。

蓮「うんと年上の女性って、美しいと思うんです。刻まれたしわとか、筋張った腕とか、人生の地図みたいでしょう」

涼子、困惑して苦笑い。

蓮「美しい人達のお手伝いができるなんて、この上ない幸せだと思いますか？」

涼子、少し言葉をつまらせながら。

涼子「私のことも、美しいと思うの？」

蓮、表情を変えずにこやかに。

蓮「もちろんおきれいだと思えますけど、少し若すぎますね」

涼子、我慢できずに吹き出す、すぐに表情を微笑みの顔に戻し、そして真剣な眼差しで蓮を見つめる。

涼子「それで、それだけ？」

蓮、一瞬たじろぐ。

涼子「君はそれだけの理由でここに来たっていうの？」

蓮、少し考えるように下を向き。

蓮「いいえ」

蓮、まっすぐ涼子を見つめて。

蓮「僕は僕ができることをしに来ました」

涼子「……そう」

涼子、答えになつてないと思いつつも、蓮の眼差しに何かを見出す。

涼子「関根君、ね。いつから来れる？」

蓮「明日から来れます！」

涼子、神妙な顔つきになり。

涼子「住み込みの募集なのは広告を見てくれたから知つてると思うけど、屋根裏しか空いてないの。それに、お給料もそんなには渡せないわ。家事手伝いとは書いたけど厳しいことも

たくさんあると思う。それでも大丈夫？」

蓮「任せてください！」

涼子「……わかったわ。じゃあ、明日の午前10時に来てくれる？」

蓮、満面の笑顔で。

蓮「僕、頑張ります！」

涼子、静かに微笑んで。

× × ×

リビングの椅子で本を読んでいる涼子。

脱衣所からやってきた美代。ややくたびれて、涼子の隣の椅子に腰掛ける。

涼子、本から顔を上げて。

涼子「百合子さん大丈夫だった？」

美代「ええ、なんとかね。それより、和室のほうがなんだか騒がしくなかった？」

涼子、少しギクリとして。

涼子「……実は面接をしに来た子がいたの」

美代、身を乗り出して。

美代「どういうこと!? もちろん落とされたのよね」

涼子「ううん、明日から来てもらうことにした」

美代、呆れて手で顔を覆いながら。

美代「あんたはなんでそんな勝手なことをするわけ」

涼子「いい子だったのよ。姉さんもきつと気に入るわ」

美代、ため息をついて。

美代「あなたのいい子は当てにならないわ。どうせ物好きで

しょ」

涼子、不安そうな顔で美代を見つめる。

美代は涼子の視線に気づかず、手で顔を覆ったまま。

### ○すずらの丘（日替わり・朝）

すずらの丘の玄関前で深呼吸する蓮。

庭先を除くと百合子が花冠を作っている背中が見える。

蓮、安心感を覚えて微笑んで、玄関の引き戸を思い切り開ける。

蓮「ごめんください」

リビングから早足で涼子が玄関に駆けつける。

涼子「いらつしやい」

蓮、深くお辞儀をする。

蓮「今日からよろしくお願いします」

涼子、蓮のつむじを微笑ましく眺めながら。

涼子「こちらこそよろしく申し上げます。改めて自己紹介をしなくちゃね。小松涼子です。実は私は正式にここに住んでるわけじゃないの」

蓮「そうなんですか」

涼子「ええ。姉が暮らしていて、私も色々と手伝っている感じね」

蓮「はあ」

涼子「まずは案内しなくちゃね」

蓮、靴を脱いで揃えるてリュックからスリッパを取り出して履く。

涼子、玄関横の脱衣所を案内する。

涼子「不思議な作りでしょう。住みやすいようにリノベーション

ンしたのよ」

蓮「趣がありますね」

涼子、蓮、廊下を歩いて和室、鍵のかかった部屋の前に  
通りながら。

涼子「今ここには私以外に4人の女性が住んでるの。鍵がかか  
る部屋はそれぞれの部屋ね」

蓮、少し興奮した様子で頷く。

涼子、少し困惑しながら。

涼子「庭先で花冠を作ってる女性は見かけたかしら？」

蓮、首だけで軽く頷く。

涼子「彼女は百合子さん。この家で1番の年長者ね。認知症が  
進んでいて、気持ちが悪くなってるみたいなの」

蓮、妙な面持ちで涼子を見る。

涼子「あとは、元教師の寿実子さんと、スナックのママさんを  
やってた幸恵さんと、うちの姉ね。今みんなリビングでテレ

ビを見ているわ」

蓮「皆さん、美しいんだろうなあ」

涼子、苦笑しながら。

涼子「どうかしらね」

涼子、リビングのドアの手前のはしごを指さして。

涼子「あれがあなたの部屋になる場所。物置として使ってたか  
ら少し荒れてると思うけど、好きに使っていいからね」

蓮「秘密基地みたいでいいですね」

涼子「荷物を置く前に、みんなに挨拶しに行きましょうか」

蓮「はい！」

ドアのガラスから、幸恵、美代が椅子に腰掛けながらテ  
レビのワイドショーを眺めている背中が見える。

幸恵の横で芹沢寿実子（79）が本を読んでいる背中が  
見える。

涼子、ドアを開け、リビングに入る。蓮も後ろに続く。

ドアを開けた瞬間、幸恵、美代、寿実子がゆっくり振り  
返る。

蓮を見た瞬間、幸恵、美代は目を見開き、寿実子は顔色  
を変えない。

幸恵「男よ！」

蓮、幸恵の声に驚いてその場に立ち尽くす。

美代、蓮から視線を外し、涼子を睨みつけ声を荒げる。

美代「涼子！ あんたどういことよ！ どうして男がここに  
いるのよ！」

涼子、困惑したように苦笑い。

寿実子、すぐに本に視線を移す。

幸恵、終始キヤーキヤー騒いでいる。

蓮、3人を見てニコニコしている。

美代、蓮をキッと睨み。

美代「あんた！何ニヤニヤしてんのよ！」

蓮、頬を緩ませながら。

蓮「すみません、あまりにも皆さんが素敵なので……」

美代、幸恵、口をあんぐりと開ける。

寿実子、顔色一つ変えず本を読んでいる。

幸恵、すぐに大笑いをして。

幸恵「面白い子ねえ」

蓮、照れたようにはにかむ。

幸恵「こんな子がいたら毎日楽しいわ。寿命ものびるってもん

よ」

寿実子、幸恵の方をちらっと見て誰にも聞こえないくらい

いの声で呟く。

寿実子「そんなすぐ死ぬみたい……」

幸恵「これからこんな綺麗な人たちと一緒に過ごせるなんて、僕

幸せです」

幸恵「うまいこと言うじゃないの！あたし気に入ったわ。あ

んな名前は？」

蓮「(に)に(に)こしながら」関根蓮です」

幸恵「蓮ちゃんね、あたしは幸恵」

美代、口をバクバクさせながら。

美代「こんなやつ、なんで採用したの！あたしは認めないわ

よ！はんかくさい！」

涼子、少し慌てて。

涼子「まあまあ、落ち着いて」

美代、涼子を睨みつけ。

美代「どろが落ち着けるって言うのよ！こんな変態と一緒に

過ごせるわけないでしょう！」

蓮、大げさに悲しむ素振りを見せる。

蓮「変態なんて悲しいなあ」

美代、蓮を睨みつけ。

美代「勝手に喋るな変態！」

蓮、目を見開きながら口をへの字にして黙る。

百合子が笑いながら廊下を勢いよく走って近づいてくる

音がリビングに響き渡る。

幸恵「百合ちゃん帰ってきた」

寿実子、本を置いて椅子から立ち上がり、リビングの扉

を黙って開ける。

百合子、裸足で足とスカートが泥だらけのまま勢いよく

リビングに入ってきて、手に持ったすすずらんの花冠を頭

上に掲げる。

百合子「できた！みてみてー！」

寿実子、また椅子に戻って本を読み始める。

涼子、振り返り少し眉を潜めて微笑む。

幸恵、子供に話しかけるようににつこり笑って。

幸恵「うん、可愛いねえ」

美代、蓮の背中越しに百合子を見てため息をつき。

美代「はあ、また洗濯……」

蓮、美代の声に反応して後ろを振り返る。

百合子、蓮の顔を見るなり顔から笑みが消え、手から花

冠が滑り落ちる。

百合子「……善治さん？」

蓮「……え？」

美代、幸恵、寿実子、涼子、目を見張る。

百合子、そのまま駆け寄って、蓮の胸元に顔を埋めるよ

うに抱きつく。

百合子「会いたかった……ずっと、会いたかったの（声を震わ

せながら）」

蓮「えっと……百合子さん？」

蓮、突然のことに戸惑いながらも抱きつかれたままである。

美代、信じられないとでも言うように顔を強張らせなが

ら、蓮を指さして涼子を見る。

美代「こいつの名前」

涼子も困惑した様子で。

涼子「ええ、善治さんじゃないわ。蓮君よ」

寿実子、小さな声で呟く。

寿実子「善治さんって、百合子さんが昔話してた」

幸恵、少し声を潜めながら。

幸恵「そんなこと話してたっけ」

寿実子、首をゆっくり縦に振り。

寿実子「さっちゃんは人の話を聞いていないもの」

幸恵「そんなことないわよ」

寿実子、幸恵の顔をじいっと見て。

寿実子「初恋の人だって、言ってた」

幸恵、大げさに驚いて。

幸恵「初恋!？」

寿実子、少し顔をしかめて。

美代、幸恵を睨みつけ。

幸恵、手で口を抑える。

蓮、動揺しながらも優しく笑って。

蓮「僕は善治さんじゃないんですけど……でも、お会いできて嬉しいです」

百合子、顔を上げて蓮を見上げる。蓮の言葉の意味をはっ

きは理解していないが、満面の笑みを浮かべ、また強

く抱きつく。

幸恵、目の前で面白いことが起こっていることが嬉しくて

にやにやする。

幸恵「いやあ、お熱いこと」

寿実子、興味がないとでもいうように本に視線を戻して。

蓮と百合子の様子を見ていた美代、目の前で起こっていることが全く理解できず、眉間にシワを寄せる。

涼子、美代の表情を盗み見て、美代だけに聞こえる声で呟く。

涼子「姉さん、ね？ あの子、ちょっと変わってるかもしれないけど、悪い子じゃないの」

蓮、百合子の背中にそっと手を添える。

美代、涼子の言葉を無視してただ黙って蓮と百合子を見つめている。

### ○すずらの丘（日替わり・朝）

空がよく晴れている。

蓮、エプロンを巻いて、にこにこしながら庭で洗濯物を干している。

リビングではテレビのワイドショーが流れており、美代、幸恵、寿実子、リビングでそれぞれテレビの前の椅子に座っている。

幸恵、食い入るようにテレビを見ている。

寿実子、分厚いフランス文学書を読んでいる。

蓮、鼻歌を歌いながら軽快に洗濯物を干している。

美代、テレビを見ているも陽気な蓮の鼻歌が気に障って集中できず、我慢ができず立ち上がり、縁側に行つて仁王立ちで蓮を睨む。

美代「ちよっと」

蓮、洗濯物を干す手を止めて。

蓮「はい？」

美代「静かに家事しなさいよ」

蓮「(にっこりして) すみません」

蓮、笑顔のまま再び洗濯物を干す。

× × ×

昼、リビングで掃除機をかける蓮。

テレビは再放送のサスペンスドラマが流れている。

寿実子、幸恵、椅子に座りながらうとうととしている。

百合子、庭で花冠を作っている。

美代、テレビを見つつ蓮を監視している。

美代「あんた、雑に掃除するんじゃないよ。角まで掃除機かけるんだよ」

蓮「(にっこりして) 気をつけます！ すみません」

美代、訝しげな表情を浮かべる。

× × ×

夕方、空は綺麗なオレンジ色。

蓮、縁側で洗濯物を干している。

リビングでは美代が椅子に座って、老眼鏡をかけて新聞を眺めつつ、蓮を監視している。

蓮が靴下をたたもうとすると、美代、椅子から立ち上がり蓮の隣に座る。

美代「靴下は丸めてまどめなさいよ」

蓮、美代の目を見て。

蓮「(にっこりして) はい！ すみません」

美代「本当にわかってんの？ あんたのすみませんは安っぽいのよ」

蓮、いたずらっぽく笑い。

蓮「じゃあ、ごめんなさいにします？」

美代、深くため息をついて立ち上がり。

美代「……もういいわ」

### ○すずらんの丘・庭(日替わり・昼)

よく晴れた晴天、蓮、美代、幸恵、寿実子は、麦わら帽子をかぶり、スコップを持って庭の整備をしている。

百合子、その横で泥団子を作って遊んでいる。

蓮「それにしても本当にいい花壇ですよね」

幸恵「百合ちゃんがね、花が大好きだったの。こうなる前は、よくお祝いにお花をくれたわね」

蓮、少ししんみりして。

蓮「……そうなんですね」

美代「そこ！ 喋ってないで手動かす！」

幸恵「おー、こわこわ」

一同、黙って花壇の整備をする。

蓮、真剣な顔で丁寧雑草を取り、すずらんの花の株を丁寧に並べ、整える。

寿実子、蓮の手元をじっと見て。

寿実子「綺麗ね」

蓮「(笑顔で) 昔色々やってたんですけど、ちょうど3年前は庭師をやってた」

幸恵「昔ってあんた大げさね、でもほんと綺麗だわ」

美代、蓮の手元を少し覗いて手際の良さに関心した素振りを見せるも、すぐに作業に戻る。

幸恵、美代の様子を見て笑いながら。

幸恵「これなら美代ちゃんも文句ないわね」

美代、バツが悪そうにして。

幸恵「まあ、蓮ちゃんにも歴史があるってことね」

蓮、手は止めずに笑いながら。

蓮「寿実子さんは教師をされてたんですね。それで、幸恵さんはスナックのママさん」

幸恵、手を止めて。

幸恵「そうそう！ 涼子ちゃんに聞いた？」

蓮「はい」

寿実子「美代ちゃんのこと、聞いてないのね」

蓮「そういえばそうですね」

幸恵「美代ちゃんはね、日本舞踊やってたのよ」

蓮「(驚いて)へえ、日本舞踊」

幸恵「そうよお、もうすぐかっただから。ここらへんじゃかなり有名よ。みんな美代ちゃんのファンだったわ」

寿実子、頷いて。

幸恵「あたしたちが仲良くなつたのも、美代ちゃんの踊りを見に行つてたのがきっかけなの。もう何年前かしらねえ」

寿実子「30年以上前よ」

幸恵「そうね、それくらいね」

蓮「だからあんなに所作が綺麗なんですわね」

幸恵「おつ、そう思った? 蓮ちゃん見る目あるねえ」

美代、ぼそつと誰にも聞こえないくらいの声で。

美代「何も知らないくせに勝手なことばかり」

百合子、泥団子を持って蓮のもとに駆け寄り、蓮の背中に抱きついて。

百合子「今日の夕ごはん、善治さんの好きなもの作るわね」

蓮、にっこり笑つて。

蓮「今日も僕が作りますよ」

百合子、ふくれつつ面をして。

百合子「だめよ、好きな人の好きな味を知らなくちゃ良いお嫁さんになれないでしょう?」

幸恵、蓮と百合子を見てにやにやして。

幸恵「いやあ、モテモテだね蓮ちゃん。こりゃ、あたしの付け入る隙はないな」

蓮、戸惑う様子もなかっただ笑っている。

### ○すずらんの丘・リビング(同日・夕)

リビングでそれぞれ椅子に座る美代、幸恵、寿実子、美代、百合子。

キッチンから料理と大量の葉をおぼんに乗せた蓮がやってくる。

蓮「えーつと、これが幸恵さん」

幸恵の前に料理と葉が置かれる。

蓮「寿実子さん」

寿実子の前に料理と葉が置かれる。

蓮「百合子さん」

百合子の前に他の料理よりもペーパースト状になった料理と、葉が置かれる。

蓮「それで、塩分控えめですわね」

美代の前に料理と葉が置かれる。

美代「なんであたしだけ事細かに説明してんのよ」

蓮、自分の席の前に料理を置いた後、にこにこしながら百合子に前掛けをつけ、自分の椅子に座り手を合わせて。蓮「では、いただきます」

美代、幸恵、寿実子、百合子、手を合わせて。

美代・幸恵・寿実子・百合子「いただきます」

各々、料理に箸をつけながら。

蓮、自分のだけ両面焼きにしてオーバーハードに焼き上げた目玉焼きを一口で頬張る。

幸恵「いやー、それにしてもリウマチほんと大変だわ。薬も最近効かないし困っちゃう。寿実ちゃんなんて甘いもの大好きなのになんでリウマチなんないかね」

寿実子「あたしは糖尿病だから」

幸恵、思い出したと言うように目を見開いて。

幸恵「そうね、そうだったわね」

幸恵、美代の方を見て心配そうに眉をハの字にして。

幸恵「美代ちゃんは血圧高いしねえ。最近は怒ってばっかだし……」

美代、味噌汁をすすりながら無表情で。

美代「余計なお世話よ」

幸恵「蓮ちゃんも大変よねえ。味噌汁とか3種類くらい作ってんじゃない？」

蓮、ご飯を口いっぱい頬張って。

蓮「ひははんのへんほうのはへへふはら」

美代「汚い！ 口の中に物入ってるときは喋るな！」

蓮、味噌汁でご飯を流し込み。

蓮「皆さんの健康のためですから！」

幸恵、微笑ましそうに蓮を眺め。

幸恵「そうだ、蓮ちゃんの歓迎会まだだったわよね」

美代「そんなの必要ないわ」

幸恵「美代ちゃん、堅いこと言わないの。ほら、もうすぐ幸恵ナイトの日だし」

美代「（ため息）もうそんな時期」

蓮、きよとんとしながら、食べこぼしている百合子の口まわりをタオルで拭く。

寿実子、我関せずという素振りでも魚の骨を処理している、

幸恵「あ、美代ちゃんため息ついて！ 良いでしょ！ 息抜きも大事よ。ここはいい場所だけずっとここにいたら息が詰まっちゃうわ！」

美代「あなたがはしやぎすぎなのよ」

幸恵、両手を叩いて。

幸恵「そうと決まれば話が早いわ！ 次の幸恵ナイトは蓮ちゃんの歓迎会に決定！ もちろん全員参加よ！」

美代「はいはい、わかったわかった」

蓮、首を傾げて。

蓮「幸恵ナイト？」

○スナック潮風・店内（日替わり・夜）

店内は薄暗く、ややオレンジ色の照明で照らされ、カウンター席もテーブル席も常連たちで賑わっている。カウンターの向かいの洗い場で、中川遊馬（21）が黙々とグラスを洗っている。

壁際のカウンター席で一人、美代はウイスキーの水割りを入れて飲んでいる。

お立ち台では既に酔っ払った幸恵が、常連客の1人と『もしかしてPARTⅡ』を歌っている。それを見ていた涼子と寿実子、テーブル席から拍手を送る。

中川由貴（50）と常連客がグラスに入ったサイダーを両手で大事そうに持っている蓮に詰め寄り。

常連客1「君、酒飲めないのかい！」

蓮、困惑しながら愛想笑いをして。

蓮「飲めないわけじゃないんですけど、明日も朝早いので」

常連客2「なんも飲めばいいべさ！」

由貴、常連客を窘めながら。

由貴「ちよっと、若い子に絡まないの！」

常連客1「君、何歳なの？」

蓮「28です」

常連客2「（大げさに驚いて）もっと若く見えるな！」

蓮、頭をポリポリと掻く。

歌い終わった幸恵、蓮の正面に座り。

幸恵「蓮ちゃんはおうちの孫とは違うわ。うちの孫は愛想ないもん」

幸恵、遊馬に向かって大きくハートマークをして。

幸恵「でもばあちゃんは雄馬ちゃんが一番大好きだよー！」  
遊馬、幸恵に目もくれず洗い物を続ける。

由貴「ママに聞いたけど、あんた札幌の人なんでしょ？ わざわざなんで函館まで来たわけ？」

蓮、愛想笑いをしたまま。

蓮「僕、うんと年上の人が好きなんです」

由貴、常連客、ポカンと口を開ける。

幸恵、由貴たちを見ながらクククと笑い、ビールを一口飲む。

蓮「すぐらの募集を見て、ここしかないって思いました。す

ごい、変な理由かもしれないですけど、綺麗な人のそばで働

くのとて、夢があるじゃないですか」

美代、グラスの水をまわす。

遊馬、美代のグラスが空いていることに気づいてグラスを

洗うのを止めて。

遊馬「作りますか？」

美代「ん？ いや、いい」

遊馬、美代に向かって軽く会釈をしてグラスを洗うのを再開し、視線を熱弁している蓮の方に向け、すぐに視線を手元に戻す。

由貴、困惑する様子を隠しめせずに。

由貴「綺麗って、あんた本気かい」

蓮、黙って首だけ縦にふる。

口をあぐり開けていた常連客たち、二斉に大笑いする。

常連客1、幸恵を指差し。

常連客1「綺麗ってお前、こんなしわしわのばあ抱けんのか

い！」

蓮、少しムキになつて。

蓮「そういうのは、できてもできなくても言わないもんですよ」

常連客1「したら、ちゅーできんのかい！」

蓮、平気な顔で。

蓮「好きになったらできますよ」

常連客たち、更に大笑い。

常連客2「いやー、すごいね君。変態だね」

蓮、薄く笑って。

蓮「そうかもしれないですね」

幸恵、蓮の様子を見て、蓮の髪の毛をわざわざわしやと撫

でる。

幸恵「ほんとにもう、変わってるのよ！」

幸恵、落ち着いた声で。

幸恵「でもね、本当にいい子よ。まだちよつとしか一緒にいないけどね。あたしにはわかる」

茶化してた常連客たちが黙る。

幸恵、いつもの調子に戻って常連客2に抱きつき。

幸恵「まあ、あたしは年上のお兄様がタイプなんだけどねえ！」

店内、和やかなムード。

カウンターで飲んでた常連客3がぼつりと口を開く。

常連客3「久々に美代さんの舞、見たいな」

美代、少し驚いた表情をして常連客3の方を向き、少し

微笑んで。

美代「見せもんじゃないわ」

幸恵「いいじゃない、美代ちゃん。蓮ちゃんだってまだ美代ちゃん

の舞見たことないのよ」

蓮、美代に期待の眼差しを向ける。

美代、洪々立ち上がり、お立ち台の上に立つ。

常連客2、蓮に向かって耳打ちをして。

常連客2「美代ちゃんは若い時、本当に綺麗でさ！ もうこの

辺の男はみんな美代ちゃんに惚れたもんよ！ 美代ちゃんは

誰にもなびかなかつただけだね」

幸恵、常連客1に向かつて。

幸恵「あらやだ、あたしは？」

常連客2「いやー、俺は幸恵ちゃん一筋よ」

すごく酔っ払った常連客1が叫んで。

常連客1「俺は美代ちゃんに今でも惚れてるぞー！」

美代、誇らしげに笑って。

美代「恋だの愛だの言わなくていいのよ。黙って見てなさい。

— 女は黙って見られればいいときもあるの」

由貴、照明の明かりを少し落とす、カラオケのリモコン

で日本舞踊の『君が代松竹梅』を流す。

美代、静かに舞い始める。

常連客1、指笛を吹く。

寿実子、涼子、幸恵、由貴、静かに手拍子。

遊馬、カウンターの静かに舞を見ている。

常連客1「いいぞー！」

常連客2「よ！ 日本一！」

美代、ガヤを気にも止めず優雅に舞い続ける。

周りは騒がしいが、蓮の周りだけ時が止まったように静

まっていた。

蓮、美代の舞に見とれて開いた口が塞がらない。

蓮の目には、美代の舞がスローモーションのように映る。

美代の腕が静かに広がり、指先まで神経が通ったような

動き。

美代、舞ってる最中に呆けている蓮と目が合うも、気にせず舞い続ける。

蓮、雑音の中、小さな声で。

蓮「綺麗だ……」

曲は流れたままだったが、美代、動きを止め、鋭く蓮を

睨む。

美代、蓮に向かつて。

美代「人の顔をジロジロ見るな。見惚れるな。口に出すな」

蓮、口を尖らせて。

蓮「だってさっきは見えてろって……」

美代、蓮の言葉を無視してお立ち台から降り、自分の席

へと戻る。

常連客たち、大笑い。

常連客2「いやー、美代ちゃん相変わらず厳しいね」

涼子、辺りを見回して、幸恵に向かつて。

涼子「私達はそろそろお暇しましょうか」

### ○スナック潮風・店外(同日・夜)

辺りは真っ暗で、風が木々を揺らしている。

店内の騒がしさが店の外まで聞こえてくる。

蓮、美代、幸恵、寿実子、涼子、並んでドアの前に立つ

ている。

ドアの横では、遊馬がたばこをくゆらせている。

幸恵「今日は楽しかったわねえ！」

一同歩いて帰ろうとする。

遊馬「ちょっといいっすか」

一同、振り向く。

遊馬、蓮をまっすぐ見ている。

蓮、涼子を見ると、涼子は頷き、蓮も頷く。

涼子「行きましようか」

幸恵「明日は昼まで寝ちゃおうかしら」

美代「あんたはいつもでしょ」

涼子に促され、美代、幸恵、寿実子、喋りながらそのまま

ますずらんの方へと歩いていく。

蓮、遊馬の側に近づき。

蓮「どうした？」

遊馬、少し黙ったあとで。

遊馬「なんであんた、老人が好きなんすか」

蓮、少し考えて。

蓮「遊馬君はさ、髪の高い人と髪の短い人だったらどっちが好

き？」

遊馬「……長い方が好きっす」

蓮「なんで？」

遊馬「……なんとなく」

蓮、微笑んで。

蓮「僕も、そんな感じ。特別な理由とかはないよ。唇が薄い人

が綺麗だと思う人がいたり、自分より体重が重い人しか好き

になれない人がいたり、そういう感じで、うんと年上の人に

惹かれるんだよ」

遊馬、タバコの火を地面で消して。

遊馬「……そっすか」

遊馬の大学の同級生たちが、店の前にやってくる。

友人1「遊馬、迎えに来たよ」

遊馬「おう」

遊馬、蓮に向かって。

遊馬「ボーリング行くんすけど、一緒に行きますか？」

蓮「いや、いいよ」

友人2「早くいこー」

遊馬、蓮に軽く会釈をして同級生たちとその場を離れる。

蓮、一人店の前で考え込む。

### ○すずらんの丘・リビング（日替わり・朝）

外は雨が降っている。

蓮、鼻歌を歌いながら美代の席の近くで正座しながらア

イロンをかける。

並んでテレビのワイドショーを見ている幸恵、美代、寿実子。

あきらかに嫌そうな顔をしている美代。

にやにやしている幸恵。

ほうつとテレビを見ている寿実子。

蓮、顔を上げてキラキラした目で美代を上目遣いで見て。

蓮「美代さん、美代さん」

美代、知らんぷりでテレビを見る。

蓮「和服って自分で着られるんですか？」

美代、答えない。

蓮、ずっと美代を見つめ続けている。

美代、視線に耐えきれず。

美代「(冷たく) 誰も着せてくれないんだから、そりゃそうでしょ」

蓮、満面の笑みで。

蓮「すごいなあ。僕、甚平しか着たことないですよ」

幸恵、吹き出して。

幸恵「美代ちゃん、罪な女ねえ」

美代、幸恵を睨みつける。

### ○すずらんの丘・リビング(日替わり・昼)

昼食が終わり、蓮がそれぞれの食器を片付けている。

百合子、一目散に庭に向かう。

寿実子、幸恵、オセロをしている。

美代、老眼鏡をかけて新聞を読んでいる。

蓮、食器を片付けながら。

蓮「みなさん、今日のごはん美味しかったですか？」

幸恵「いつも美味しいわよ」

寿実子「味噌汁が薄味なのに美味しい」

蓮、自慢げに。

蓮「いいよこの味噌使ってますからね」

幸恵「お腹で出してるんですよ。いいのにそんなにいいものばかりじゃなくて」

蓮「いいんです、好きでやってることですから」

蓮、少し自信なさげに。

蓮「美代さんは？」

美代、新聞から顔をあげずに。

美代「いつも通りの味よ」

蓮、困ったように微笑む。

幸恵「蓮ちゃん、落ち込まないの。いつも通り美味しかったって意味よ」

蓮「幸恵さん、ありがとうございます」

寿実子、庭を指指して。

寿実子「あっ！」

寿実子の大きな声に一同一斉に庭に顔を向ける。

庭で石を集めていた百合子のしゃがんだ後ろ姿。お尻の方が茶色く汚れている。百合子は異変に気づいていない。

幸恵「あら、蓮ちゃんが来てから粗相することなかったのにね」

美代、老眼鏡を外し、立ち上がろうとするが、先に蓮がサンダルを履いて百合子のもとへ駆け寄り、百合子の背中を支える。

蓮に気づいた百合子、ばあつと笑う。

蓮「百合子さん、可愛い服が汚れちゃった。着替えませんか？」

蓮、百合子の額の汗を拭き。

蓮「それに、今日は随分暑いから、ついでにお風呂に入って汗を流すのはどうですか」

百合子「善治さんが言うならそうするわ」

蓮「ちよつとここで待っててくださいね」

蓮、縁側の方に戻り百合子に聞こえないように。

蓮「入浴介助はどうしますか？」

美代、蓮のスムーズな対応に戸惑いながら。

美代「え？」

蓮「いつもは皆さんで入浴されてると思いますが、今回は僕が

しますか？」

幸恵「いいえ、大丈夫よ」

寿実子「洗濯だけお願い」

蓮「わかりました」

幸恵、寿実子、サンダルを履いて百合子の側に寄り。

幸恵「百合ちゃん、ちよつと早いけど一緒にお風呂入ろうね」

百合子、無邪気な笑顔で。

百合子「うん！」

寿実子「下着とズボン、バケツに入れて脱衣所に置いておくから」

蓮、頷く。

美代、立ち尽くしている。

### ○すずらんの丘・洗面所（同日・昼）

洗面所で洗面器の中で汚れた下着を石鹸で手洗いしている蓮。

美代が黙って入ってくる。

美代、蓮の後ろに立ち。

美代「……こういう仕事、前にもしたことあるの？」

蓮、手元を見たまま。

蓮「ないですよ」

蓮、下着を水でゆすぎながら。

蓮「美代さんは、綺麗な手ですよね」

美代「（鼻を鳴らして）何がよ。こんなシワシワの手」

蓮「なんでシワシワが綺麗じゃないんですか」

美代「……あんたが変わってんのよ」

蓮、下着を絞って。

蓮「美代さんは、なんで舞を始めたんですか？」

美代「あなたには関係ないわよ」

蓮「厳しいなあ」

風呂からあがった百合子、ドアの陰から蓮と美代の様子

をじっと見ている。

### ○喫茶店ひし伊（目替わり・夕）

客がまばらにいる店内。

丸いテーブルに座り、蓮と涼子は向かい合っている。

涼子、アイスほうじ茶ラテを一口啜る。

蓮「すみません、急に」

涼子「ううん、いいのよ」

蓮、クリームソーダを眺めながら思いつめたように。

蓮「家だと、皆さんがいるのであまり話せないかなって思って」

涼子「何か困ったことでもあった？」

蓮「いえ、そういうわけでは……」

蓮、涼子をまっすぐ見つめて。

蓮「あの、美代さんって……男の人が嫌いなんですか？」

涼子、思ってもいなかった質問に戸惑う。

涼子「どうして？」

蓮「いえ、なんとなく、そんな気がして」

涼子、どこまで話していか悩みながらも。

涼子「若い頃はそんなことなかったのよ。舞台に立てば誰もが

見惚れてたし、姉もそれを誇りに思ってた。けどね、人の目つ

て残酷なのよ。若い頃の称賛が、年を取るとヤジに変わるの。

幸恵さんのところのお客さんは、みんな優しい人ばかりだけ

どね。そういう人ばかりじゃないから」

蓮、うつむき。

涼子「でも、根はいい人よ」

蓮「わかります」

涼子「幸恵さんたち以外にもね、仲良くしていた人が1人いた

の。数年前に孤独死しちゃってね。それと同じ時期くらいか

な。百合子さんも認知症が進んで……。お姉さん、同じ思い

をしたくなかったのね。その時にすずらの丘を作ったの」

蓮「美代さんが……」

涼子「百合子さん、すぐお姉さんのこと可愛がってくれてた

から、百合子さんがあいうふうになってしまっって、最初は

すぐく戸惑ってたわ」

蓮、静かにクリームソーダを啜る。

### ○すずらの丘・庭（日またぎ・昼）

一人で雑草をむしっている蓮。

物陰から覗き込む雄馬。

○すずらんの丘・廊下（日またぎ・昼）

廊下ですれ違う蓮と美代。

蓮、買い物カゴを片手に持って軽く会釈する。

美代、呆れつつも満足でもない。

美代「家の中なんだからいちいちしなくていい」

蓮「だって嬉しくて」

美代「毎日顔合わせて何が嬉しくてさ」

蓮「へへ、いつてきます」

美代「……気をつけな」

リビングの方から蓮と美代の様子を見ていた百合子。手

に持っていた花冠をほとりと落とす。

○すずらんの丘・リビング（同日・夕）

封筒を持って涼子がリビングに入る。

涼子「あれ？ 蓮君は？」

リビングで新聞を読んでいた美代、顔だけ涼子の方を向

いて。

美代「あれなら夕飯の買い出し」

涼子「そっかあ、給与明細持ってきたから帰ってきたら蓮君に

渡しといて」

涼子、テーブルの上に封筒を置き、美代の隣の椅子に腰掛け。

涼子「蓮君はうまくやってる？」

美代、新聞から目を逸らさず。

美代「あたしに聞いてどうすんのよ」

涼子「どうって……一緒に暮らしてる人に聞くのが一番いいで

しょ」

美代「それより百合子さんが心配よ」

涼子、思ってもいなかった言葉に驚いて。

涼子「百合子さん？ どうして？」

美代、新聞を置いて遠くを見つめる。

美代「……誰にも愛されなくなった女が、誰かを愛したがると

大変よ」

美代、そのまま涼子を置いて自室へ。

○すずらんの丘・リビング（同日・夜）

家計簿をつけている蓮。

その横にべったりとくっついて離れない百合子。

美代、幸恵、寿実子、パックをつけながらニュースを見

ている。

蓮、パックをつけている3人を微笑ましそうに見て。

蓮「美代さん、パック似合ってますね」

美代、パックがはがれないように極力口を動かさないで。

美代「余計なこと言うんじゃないよ、ばか」

美代を見つめる蓮を不満げに見る百合子、突然美代を指さして。

百合子「善治さん、最近ずっとあのひとばかり喋ってるわね」  
蓮「え？」

蓮の視線がゆっくり百合子へと移る。

百合子の唇がかすかに震える。

百合子「……あの人、踊る時だけ綺麗なだけよ」

百合子、俯く。

一同黙り込む。

美代、そっとバックを剥がす。

### ○すずらんの丘・和室（日替わり・昼）

一人で音楽もかけず日本舞踊を踊る美代。

しばらく踊り、突然立ち止まって自分の手の甲を見つめる。

### ○すずらんの丘・庭（日替わり・朝）

日差しが真夏の気配を感じさせる。風鈴の音が遠くから響いている。庭には百合が咲いている。

小さな金魚鉢に赤と黒の金魚が1匹ずつ泳いでいる。

蓮、ホースを持ち、大きな金魚鉢を洗っている。

美代、しゃがみこんで退屈そうに柄杓で手に水をかけて涼んでいる。

美代「なんで2匹しかないのにこんな大きな水槽が必要なの？」

蓮「狭いと息苦しそうじゃないですか」

美代「鯉呼吸で苦しいも何もないでしょ」

蓮、小さな水槽の方をちらっと見て。

蓮「金魚って、なんだか美代さんに似てますね」

美代、何を言ってるんだこいつはという顔で蓮を睨みつける。

蓮、苦笑いをして。

蓮「ほら、いつも和服を着てるから。ひらひら優雅な感じが似てますよ」

美代「また褒めてるのか褒めてないのかわからないことを……」

蓮、大きな水槽に水を満杯まで入れ、立ち上がりホースの水を止めると、視線の先に美代のうなじが見える。

美代の髪が風に揺れ、蓮は小さく息を呑む。

美代、蓮がずっと黙っているから何かと思つて振り向くと、蓮が真剣な顔をしていたので慌てて顔をそらす。

蓮、しゃがみこんで金魚を両手ですくいあげ、大きな水槽に移す。

美代、黙って蓮の手を見つめている。

○すずらの丘・リビング（同日・昼）

蓮、美代、幸恵、寿実子、百合子の前にスイカが並んでいて、それぞれ食べ始める。

寿実子、他の人より自分のスイカが小さいことを気になる。

蓮「すみません、糖尿病だとそのサイズのスイカじゃないと駄目だつて」

寿実子、黙って再びスイカを食べる。

百合子、顔にたくさんスイカの種をつけながら蓮にすり寄り。

百合子「ねえ、善治さん。今度、デートしましょうよ」

幸恵、恐る恐る美代の顔を見る。

美代、顔色を変えずスイカを黙々と食べている。

蓮、百合子の顔についている種を取りながら。

蓮「デートですか？」

百合子「うん！ そう！ ねえ、いいでしょう？」

蓮、笑いながらも考え込む。

美代「行ってきなさいよ。それもあなたの仕事でしょ、善治さん」

蓮、美代を見つめる。

幸恵、呆れたように笑う。

蓮、戸惑いながらも再び百合子に笑顔を向けて。

蓮「どこか行きたいところはありますか？」

百合子「お花がいっぱいあるところ！」

幸恵「元町公園とかいいんじゃない？ でも、百合ちゃん歩ける？」

百合子「歩ける！ 元町公園！」

幸恵「蓮ちゃん、行くととき家からお花持ってってあげて。多分

百合ちゃん花冠作りたくなると思うから」

蓮「はい、わかりました」

百合子、満足そうに微笑んでいる。

蓮「楽しみですね」

蓮も微笑み返し、スイカの皮とお皿を片付けにキッチンに行く。

幸恵、美代に向かって。

幸恵「美代ちゃんって、ほんと見た目以外可愛くない女ねえ」

美代、眠ったふりをして目を閉じる。

○元町公園（日替わり・昼）

表わら帽子をかぶった百合子、日陰にあるベンチでソフ

トククリームを食べている。

蓮、横で微笑ましげに百合子を見つめ。

蓮「美味しいですか？」

百合子、サンダルを履いた足をバタバタさせながら。

百合子「うん！」

蓮「よかったです」

百合子、ソフトクリームを食べ終えて。

百合子「花冠作りたいなあ」

蓮「花壇にある花では無理ですけど、家からユリを持ってきま

したよ」

蓮、脇に置いてあつたトートバッグから束ねられたユリ

を取り出して百合子に渡す。

百合子、黙々と花冠を作っている。

蓮、不器用な手つきで百合子の見様見真似で花冠を作っ

ている。

百合子「善治さんは、お花好き？」

蓮「そうですねえ、好きとか嫌いとか考えたことないかもしれ

ないな」

百合子「お花はいいわよお」

蓮「百合子さんはお花が似合いますね」

百合子「そうかしら」

百合子、完成した花冠を蓮の頭にさせる。

蓮「ありがとうございます。でも、僕には可愛すぎるんじゃないな

いかな」

百合子「似合うわ。だって、私の善治さんだもの」

蓮、少し困ったように笑う。

百合子「……ねえ、こんな幸せずっと続けばいいのにねえ」

蓮「……そうですね、ほんとに」

百合子、空を眺めながら、ふっと笑顔が消え、まるで別

人のような顔つきになる。

百合子、蓮を見つめ。

百合子「蓮さん」

蓮、百合子の言葉にハツとする。

百合子「美代ちゃんのこと、よろしくね」

次の瞬間、百合子の身体がふらりと傾き、そのまま地面

に崩れる。

蓮、百合子の肩を抱いて。

蓮「百合子さん!？」

### ○病院・個室（日替わり・昼）

ベッドの上で、呼吸器をつけて眠っている百合子。

脇に置いてある花瓶の花を取り替える蓮。

美代、寿実子、黙って百合子を見つめている。

幸恵、ハンカチで目をおさえている。

涼子、ドアから入ってきて。

涼子「百合子さん、どんどん呼吸するのも忘れてきちゃって

んだって」

幸恵「なんで、ずっと元氣だったのに……」

静まり返る病室。

美代、百合子を見つめたまま。

美代「百合子さんに何したの」

幸恵「ちよつと、蓮ちゃんは悪くないでしょうよ」

蓮、思い詰めて、……。

○すずらの丘・外（日替わり・夕）

蓮、ゴミ出しを終えて家の中に戻ろうとするところに雄馬がやってくる。

蓮「お、どうしたの。幸恵さんに呼ばれたの？」

雄馬、首を横に振り。

雄馬「別に、そんなたいしたことじゃないんですけど、あんたに言いたいことがあったから」

僕？ と自分を指差す蓮。

雄馬「俺、あんたのこと誤解してたんすよ」

蓮「誤解？」

雄馬「前言ってたじゃないすか。ただ好きだけだった。あん時、なんだそれって思ってたんすよ。ていうか変態だと思ってたっていうか」

蓮、苦笑い。

雄馬「そんなやつがばあちゃんと一緒に住むなんて気持ち悪

いって思ってたつす」

蓮「まあ、そうだよね」

雄馬「でも、何回かこの家の前通ってあんたが仕事してるとこ見てて」

蓮（驚いて）え、見てたの」

雄馬、少しふてくされて。

雄馬「……たまたまつす」

雄馬、咳払いして。

雄馬「それで、あんたのこと、俺すげえなって思いました。ただ好きってだけじゃ、あんなふうになんと仕事できないつすよ」

雄馬、深々と頭を下げて。

雄馬「ばあちゃんのこと、これからお願ひします」

頭を上げ、また軽く会釈をして去る雄馬。

その背を見送ったまま、物思いにふける蓮。

○病院・廊下（日替わり・昼）

壁際のベンチに腰掛ける幸恵、寿実子。

幸恵、ペットボトルの緑茶を握りしめている。

寿実子、黙って幸恵の手を握る。

○病院・個室（同日・昼）

百合子、呼吸が止まったり浅くなったりしている。

美代、座って黙ったまま静かに百合子を眺めている。

百合子、ゆっくり目を開ける。

美代、ガタツと椅子から立ち上がり。

美代「百合子さん……?」

百合子、目だけで美代を見て、口を小さく動かす。

美代「どうしたの……?」

美代、百合子の口元に耳を近づけて。

百合子「み……よ、ちゃん」

美代、涙ぐんで。

美代「うん、何……。百合子さん」

百合子「ありが……とうね、あなたは、本当に……かわいい……子」

百合子、また静かに目を閉じる。

美代、一粒涙を流し、動けないでいる。

### ○すずらんの丘・リビング（日替わり・夕）

電気もつけないまま、もう薄暗くなった誰もいないリビングで、美代が庭の方をぼうっと見ている。

百合子がいつも座っていた場所に、蓮と一緒に行った公園で作ったもうしおれてしまった花冠が置かれている。

### ○すずらんの丘・リビング（日替わり・昼）

夏の日差しが更に強まっていた。庭には何の花も咲いておらず、蝉の声だけが騒がしい。

いつものように、美代、幸恵、寿実子が椅子に座りながらテレビでワイドショーを見ているが、どこか心ここに  
あらずといった感じ。

涼子、縁側に腰掛けてぼうっとしている。

蓮、いつも通りにこやかに鼻歌まじりで掃除機をかけている。

美代、蓮の様子に苛立ち、椅子から立って掃除機をかけている蓮の前で仁王立ちをして。

美代「あなた、どうして笑ってられるのよ」

蓮、掃除機のスイッチを切る。

美代「百合子さんが、いないっていうのに、なんでいつも通りヘラヘラ笑ってられるわけ?」

蓮、一瞬たじろぐも、すぐに笑顔に戻り。

蓮「僕が笑ってたら、みんなも笑顔になるかと思って」

あつけらかんとした蓮に、美代我慢が効かなくなり。

美代「そんなの、そんなの言い訳よ! 百合子さんは、あなたのこと思ってたのに、信じてたのに、あなたはヘラヘラ笑って、悲しみもない!」

リビングではテレビの音だけが響いている。

美代「あんなんで偽善者よ！」

涼子、立ち上がり、美代に向かつて大声で。

涼子「いつも通り過ごしてる人が悲しんでないって？」

涼子の感情的な声に、美代、たじろぐ。

涼子「あんな、何年生きてんのよ！」

美代、涼子を睨みつけ。

美代「あたしより若いあんなに何がわかるのさ！」

涼子、ぐっと唇を噛み、言葉を読み込む。

蓮、掃除機を持ってリビングを後にする。

### ○すずらの丘・屋根裏部屋（同日・夕）

部屋には布団と簡易的な机以外何も置かれていない。

部屋の片隅に置かれた敷布団に横たわって目を瞑っている蓮。

寿実子・声「ちよっと」

屋根下から声がしたので、蓮が下を覗くと、寿実子が見上げている。

寿実子、ゆっくりはしごを登り、中腹で蓮に向かつて手を伸ばす。

蓮、寿実子を引っ張る。

寿実子、はしごのすぐ横に座って。

寿実子「夏場にこんな暑いところでよく眠れるわ」

蓮「ここしかないですから」

寿実子「一つ部屋が空いたでしょ」

蓮「あそこは……百合子さんの部屋じゃないですか」

蓮、わかりやすく落ち込んで。

寿実子「誰にも話したことないんだけど」

蓮、脈絡のない寿実子の話に首を傾げる。

寿実子「私ね、女の人が好きなの」

蓮、思ってもなかった言葉にどう反応してよいかわからず。

寿実子「あなたくらい若いときは、こんなこと言う人はすごく変な目で見られた。今はそんなことないと思うけど、私ともと口数が少ない方だし、わざわざ言う必要もないから、

今まで言っただけだけ」

蓮「どうして、僕にそれを？」

寿実子「あなたも、恋事で人からの目を気にしたことがあるでしょう？」

蓮、下を向いて。

寿実子「でも、それって私とあなたでどうなることでもないと思っ」

寿実子、蓮の手をそっと握って。

蓮、寿実子の目を見る。

寿実子「誰かを好きになることに理由も資格もいらないし、年

が近くても同じでも、性別が違って同じでも、わからないことはわからない。相手のことをわかりたいと思うかどうかで、それはあなたの強みでしょう?」

蓮、思い詰めたように、……。

寿実子「好きって気持ちには、ままならないもの。でも、それが人を正しくさせることもある」

蓮、目を伏せてゆっくりと頷く。

蓮「寿実子さんって、良い先生だったんでしょね」

寿実子、口元だけで笑って。

寿実子「そういう人は少なかった」

蓮、子供のようニツと笑う。

### ○すずらんの丘・屋根裏部屋（同日・夜）

蓮、暗がりの中で布団に横たわっている。スマホの画面の光が、蓮の真剣な顔を照らしている。

### ○すずらんの丘・和室（日替わり・朝）

朝日に照らされながら、ゆっくりと舞う美代。

そこに蓮が入ってくる。

美代、気にもせず舞い続ける。

蓮、手に持っていた枯れたユリの花冠を美代に見せる。

蓮「この花冠、百合子さんと作ったんです」

美代、舞をやめて蓮を見る。

蓮、ズボンのポケットからスマホを取り出し、画面を見せる。

画面には、蓮とベッドに横たわってピースしている老女が写っている。

蓮「僕の、恋人だった人です」

美代、表情を変えず、……

蓮「年上の人と付き合ったのは、その人が初めてでした。僕がうんと年上が好きだと言っても、少しも笑わなくて、まるで同じ年の二人みたいに自然に付き合ってたと思います」

蓮、少し言い淀んで。

蓮「ついこの前、亡くなりました。ここに来る前です。老衰で、大往生だって、病院の人は言っていました」

美代、黙って蓮を見つめている。

蓮「大往生って、なんですかね」

蓮、悔しそうに。

蓮「大切な人が亡くなってしまふのは、どうしようもなく悲しくて、怖いです。百合子さんがいないのもすごく悲しい」

蓮、美代の目をじっと見て。

蓮「でも、あの時とちがうのは、僕以外にも悲しんでる人がそばにいることです」

蓮、突然スマホを操作して、『君が代松竹梅』の音楽を

かけ、下手くそな日本舞踊を踊り始める。

蓮、美代がスナックで音楽を止めたところで、次どう踊つたらいいかわからなくなり、変な動きになる。

美代、笑いつつも、蓮の必死な顔を見て感極まって涙が出てしまいそうになる。

蓮、額に汗を浮かばせている。美代の笑った顔を見て、舞をやめ。

蓮「僕、美代さんの笑ってる顔が、好きです」

美代、笑うのをやめて。

蓮「怖いのをなくすことは僕にはできないけど、それでもやっぱり喜ばせたいと思います。答えになってないと思うけど、美代さんは綺麗で、僕は美代さんが好きで」

蓮、頭を抱えて。

蓮「すみません、言葉がまとまらない」

美代、蓮の手から花冠を受け取って。

美代「……あんたは目が腐ってるわ。私なんかを綺麗と言うなんて」

美代、花冠をじっと見つめて。

美代「(ほそつと)でも、だからあんたのこと、ちよつとだけ嫌いじゃないのよ」

蓮、目を丸くしてすぐに満面の笑顔になり。

蓮「じゃあ、僕は目が腐っててよかったです」

美代、少し呆れて笑う。

美代「あんた、おくりびとって映画知ってる?」

蓮、首をかしげて。

美代「(ため息)あんたはもつと文化に触れなさい」

蓮「それで、その映画がどうしたんですか?」

美代「あれは甲いの話だったけど、あんたはおくりびとじゃないくて、おくりものかもね。ちよつと迷惑な」

蓮、真面目な顔で。

蓮「おくりものは美代さんじゃないですか。僕は幸運な男ですよ」

美代「救いようのないばかだねあんたは」

蓮、美代、見つめ合ってそつと微笑み合う。

### ○すずらの丘・リビング(日替わり・昼)

暑い夏が過ぎ去り、日差しも和らいできている。

リビングのテレビでは、昔の歌番組の再放送が流れており、幸恵、寿実子がぼうつと見ている。

織井茂子の『黒百合の歌』が流れると。

幸恵「すみちゃん、この歌好きだったわよね」

寿実子「さっちゃんが小さい頃よく歌ってたからね」

庭では涼子が洗濯物を干している。

シャツが風にそよぐ。

美代、縁側で座っている。一生懸命作業をしているが、リビングから何をしているのか見えない。

蓮、屋根裏部屋から足音を立てて降りてきて、リビングに入ってくる。脇に介護の勉強本を抱えている。

蓮「涼子さん、すみません。洗濯物干してもらっちゃって」

涼子、朗らかに。

涼子「いいのいいの。今日仕事休みだから」

美代、顔だけ振り向いて。

美代「騒々しいわね」

幸恵「勉強捗ってる?」

蓮「おかげさまで!」

寿実子「試験対策なら考えてあげてもいいけど」

蓮「わあ! それはお願いします」

美代「まったく、昼食も食べれないくらい忙しいっていうのか

い」

幸恵「美代ちゃん、一緒に食べれなかったからって寂しがらな

いの」

美代、幸恵を睨みつけて。

蓮「すみません。ちょっとだけやろうと思ったら熱中しちゃっ

て」

涼子「蓮君のごはん、ラップにかけてあるから食べちゃって」

蓮「ありがとうございます!」

蓮、ご飯、漬物、ひじきの煮物、オーバーハードに焼き上げた目玉焼きにかけられたラップをはずし、手を合わせて。

蓮「いただきます」

美代、目玉焼きを見て。

美代「あんたって、目玉焼きの好みまで変わってるわよね」

蓮、目玉焼きを一口で頬張ってきよんとする。

幸恵「(覗き込んで) そろ?」

美代「半熟の黄身が苦手って人は、まあ見るけど、両面焼きで

全部カチカチの目玉焼き食べる人なんて、あんまりいないわ

よ」

蓮、自分の好みに美代が気づいていることに嬉しくなって

微笑む。

蓮「子どものころから、これが一番好きなんです」

美代、あまり興味がなさそうに。

美代「ふうん」

蓮「あ、そういえば。あの商店街のところに新しいお店が出来

たんですって。たいやき屋さん。明日行きませんか?」

美代、渋い顔をして幸恵たちの方を見る。

幸恵、わざとらしく。

幸恵「あー、明日は私と寿実ちゃん出かけるからいけないわ、

残念」

寿実子、顔の前で手で×を作る。

美代、今度は涼子を見る。

涼子、いたずらっぽく笑い。

涼子「明日は仕事だわ、残念」

美代、振り向くと蓮がキラキラした眼差しで見つめている。  
る。

美代「……あんたって本当にうるさいわね」

蓮「じゃあ無言で並んで歩きます」

美代「行くとは言っていないでしょ」

蓮「じゃあ、行かないって言いました？」

美代「……明日の朝、天気次第ね」

美代、呟いた後そっぽを向いて口元を緩める。

蓮、小さくガッツポーズをしてご飯をかきこむ。

美代、手元を見る。

美代の手には、不器用に作られたコスモスの花冠。

美代、優しく花冠を撫でる。

(終)



第31回函館港イルミネーション映画祭2025

第29回シナリオ大賞 [準グランプリ]受賞作品

# オーバーハード

作:星 瑩 まひろ

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2026年2月20日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号(函館市地域交流まちづくりセンター内)

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：いーハコタテ事務局

〒042-0942 北海道函館市柏木町31-15-207

TEL 0138-52-3727 <https://www.ehako.com/>

---